

論文の内容の要旨

論文題目 国民国家形成期のトルコにおける「国民的」漫画キャラクターの誕生と意義
——伝統と近代の間に描かれた人物形象が獲得した自立性と表象機能——

氏名 横田 吉昭

1923年に独立したトルコ共和国では、1930年代から40年代にかけてジェマル・ナーディル（Cemal Nadir、1902–1947）が登場し、漫画スタイルを一変させて人気を博し、「国民的」、「民族的」な芸術家と評価された。その大きな要因となったのは、ナーディルが創り上げたアムジャベイ（Amcabey、おじさん）という登場人物が「キャラクター」として特徴的な機能をもっていたためと考えられるが、日本の「漫画」と異なる風刺漫画が中心のトルコでは、作品から自立した「キャラクター」の文化そのものが希薄であり、このような「キャラクター」の誕生は稀であった。そもそもイスラームの下では図像表現が発展しなかったため、トルコの漫画は19世紀末のオスマン帝国時代に西洋から導入されたものだった。それにもかかわらず、なぜアムジャベイという人気キャラクターが成立し、なぜナーディルは「国民的」とまで称されたのか。その謎を解くには、ナーディルの漫画が現れたのがトルコの国民国家の形成期であり、「国民」と「民族」の構築が必要とされていた状況であったことに注目しなければならない。本論文は、そのような時期に、彼の漫画とその中核であるアムジャベイというキャラクターがいかなる機能を備え、

どのように「国民」と「民族」を表象し、当時のトルコ社会にどのような意義を持ち得たかを解明するものである。

独立後のトルコでは、国民国家の要素として、民族意識の醸成と国民の紐帯となる文化が必要とされ、イスラームを脱し、近代的でありながら西洋の模倣ではないものが模索された。その中でナーディルの漫画は、一般読者から共感を得たのみでなく知識人層からも評価され、国家にとって望ましい「国民的」かつ「民族的」な芸術と称揚された特異さがある。このようにトルコの漫画史上で特異かつ重要な位置にあるアムジャベイというキャラクターを中心としたナーディルの漫画の成立過程と意義を、以下のように論じた。

第1章ではオスマン帝国における漫画のあり方と、共和国独立後の転換を概観し、ナーディル登場の前提を示した。

まずトルコの漫画は、1867年に、帝国が近代化を目指す状況下で、新聞・雑誌という西洋的なメディアに付随して導入された。そのために、運営と享受の主体は庶民層ではなく、改革的なインテリ・エリート層であり、ジャーナリズムの一部として政治批判の手段となるという状況が生まれた。1878年に始まったスルタン専制期に批判的メディアは封殺されるが、1908年の政変後は西洋美術の技法が本格的に導入され、政治状況も活発化して、ジャーナリズムと共に漫画も一層拡充した。

しかし、第一次世界大戦の敗戦を経た共和国独立後には一党独裁体制が確立し、政権への批判は困難となり、国民国家形成のための文化政策のストレスが加わることになった。ナーディル登場の前提には、比較的高尚なメディアとしての漫画が、近代化と国家形成の流れの中に置かれる状況があった。

第2章では、ナーディルの漫画の人気と評価の形成過程をたどり、それらの基にある、政権が求めた「国民文化」と「民族性」の内実を示し、彼の漫画の作品群に描かれた「国民」像を分析した。

ナーディルの活躍の契機には、国民語を作り出す1928年の文字改革があった。その後の識字率の向上による出版の大衆化と庶民読者の増加に伴い、帝国時代のスタイルを脱した彼の漫画は人気を獲得し、知識人層からもトルコのオリジナルの文化と評価され、他の漫画家は彼のスタイルに追随した。その評価の背景には、民俗芸能などに西洋の技法を接木した作品を奨励し、文化啓蒙の拠点として「国民の家」という施設を全国に置くといった一連の文化政策が、人々が共感する「国民文化」を作り出せなかった実情があった。

彼の漫画は帝国時代のそれとは異なり、大都市イスタンブールと周辺に住む多様な庶民の伝統的な部分が残る日常が主題材であり、急激な近代化などへの彼らの不満や実感を描いた。その中心となるアムジャベイは、連載中に身体が極端に丸くなって他の人物像と異なる存在になり、同時にあらゆる場所で多様な人々に向き合う遍在性を獲得したのである。

第3章では、第二次世界大戦期から戦後にかけての国家体制が強化される状況下でのナーディルの漫画の展開と作品への評価を検討した。

二つの陣営の狭間にあったトルコは1945年2月まで中立を維持し、そのための戦時統制

は人々の生活を圧迫した。ナーディルの漫画は、政権寄りの立場から非常時の「トルコ国民」としての自負を訴えるとともに、統制によって生活を圧迫された庶民を慰撫する傾向が強まった。同時に大戦の状況を風刺する漫画を描く機会が増え、彼には戦争とファシズムの批判者という面が加味された。1942年にはアムジャベイを看板とした雑誌を発行するなど、彼の活動はむしろ拡充した。

大戦後はそれまでの政策の矛盾が露呈し、1950年に政権は交代するが、ナーディルは1947年に死去し、トルコの偉大な芸術家としての評価は定まっていたのである。

第4章では、ナーディルの漫画とアムジャベイとの比較対象として、同時代の他の漫画の人物が、「国民的」なキャラクターとして評価されなかった理由を検証した。その一つである庶民的な伝統芸能の人形だったカラギョズは、異形の道化性を生かした風刺性を持つキャラクターとして成立し得る要素を持ち、帝国時代最初期から体制風刺を目的とした漫画に活用された。しかし、体制風刺を封じられた共和国独立後には旧弊のものとされ、本来の庶民性も失われていった。

一方、帝国時代からの人気漫画家ラミズ・ギョクチェ (Ramiz Gökçe) が描いた女性トンプル・テイゼは、その豊満な身体から、近代性を併せ持ちつつ、トルコ男性の女性への嗜好を反映する存在で、実在するようなキャラクターとして人気を博した。しかし、彼女の存在は、伝統的な男性中心の社会が背景であり、アムジャベイのように公的に称揚され得るものにはならなかった。アムジャベイのみが、キャラクターとしての特異性を持ちながら、ユーモラスな批評眼を備えていたことが確認される。

第5章では、ナーディルの漫画のどのような構造が、「国民」の「民族的」とされる部分を、人々の共感を呼びながら表出したかを追究した。

まずナーディルの漫画は、トルコの庶民的で伝統的なユーモア表現と関連していた。その一つは、伝承民話の主人公ナスレッディン・ホジャである。ホジャが民話の中で示す、抑圧者への批判や日常の不満をユーモアに転じる道化的な知恵は、山口昌男らが指摘するように人々を現世の軋轢から解放する点で、アムジャベイが継いだものである。また、彼の漫画の構造は、多様な庶民の鏡像である道化的な人物の対話による点ではカラギョズ芝居を継承していた。彼の漫画は、人々が親しんできた、民族的なものにつながる伝統表現を再生したのである。

また、ナーディルの漫画の共感のシステムの一つに、人物像の視線を介在する心理学的な効果があった。庶民である読者は、その鏡像である漫画中の人物と視線を共有する。アムジャベイも、人々の語りを視線と共に読者に提示する。したがって、見る者と見られる者の主体が共に庶民である彼の漫画は、帝国時代の漫画以上に強い共感作用を持っていたと考えられる。

特に重要なのは、ナーディルの漫画の描画が、「民族性」のみならず独自の近代性を表出する点である。その主要因には、帝国時代の西洋美術の技法に即した漫画と異なる、滑らかで単純な曲線による「丸さ」があった。着目すべきは、その描画の根源に、彼が習得

していた伝統美術のアラビア文字カリグラフィが存在する点である。カリグラフィは公的な掲示やモスクの装飾に用いられ、人々に親しまれたが、文字改革後に表舞台から消えた。だが、その滑らかな線による量感などの造形要素や形象表現はナーディルの描線に生かされた。それによるアムジャベイの身体などの「丸さ」は親しみを生むだけでなく、かつて人々が親しんできた造形感覚を秘めていたのである。

一方、この「丸さ」は、運動や感情の表出という、ワシリー・カンディンスキーらが追及した造形理論が説明する表現効果につながる。その効果を生かしたナーディルの描画には、映画の運動性につながるような、帝国時代の漫画にはない斬新な表現があった。

また、そのデザイン的な簡潔さは、文字改革後の可視的な近代化の表象の一つである新聞・雑誌に整合する。アムジャベイに象徴される彼の描画は、国家にとって望ましい近代性と民族的な感覚につながる伝統を両義的に備えていたのである。

変わりつつある社会を表象する新たな漫画が国民から広く支持される状況は、第二次世界大戦後の日本における手塚治虫の漫画の例に相似する。彼の新たなスタイルの作品は、民主化された時代にふさわしいものとして若い読者に受容された。同様に、帝国時代のものを脱し、西洋のものとも異なるナーディルの漫画とアムジャベイは、伝統と近代の錯綜するトルコの一面と「国民」を表象しつつ、庶民に受容されたのである。

終章では考察をまとめ、文化状況と漫画キャラクターの関連という視座の他地域への援用にも言及した。

本来庶民的な部分を持つ漫画は、トルコ共和国の形成期に国家主導の近代化の中で特徴的な受容のされ方をした。その受容とは、アーネスト・ゲルナーが指摘するように、国家が要請する文化に馴染めない庶民が、それまで帰属してきた文化の中に居場所を求めたのであり、その場所とはアムジャベイという仲介者が存在するナーディルの漫画だったと結論できる。したがって、彼の漫画が示した庶民の主体性は後進に受け継がれたが、アムジャベイのようなキャラクターは再び現れなかったのである。